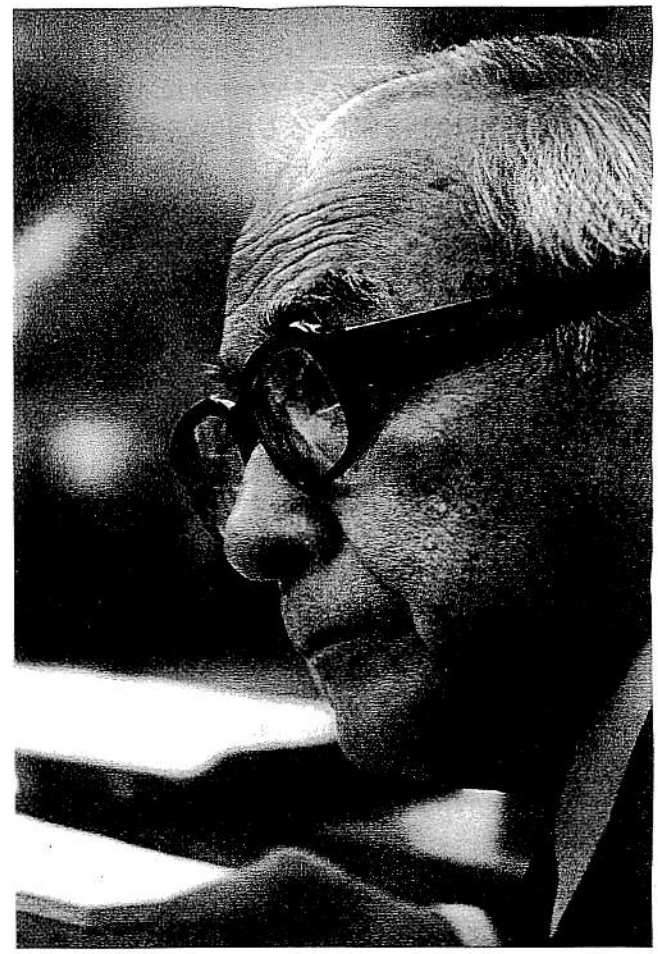
「苦楽吉祥」の人

向笠廣次元ＲＩ会長について語る

中津ＲＣ　川嶌　眞人



強靭な体力と精神力を回復させたヨット

向笠廣次（むかさひろじ）先生のことを直接知っている方が少なくなり、一体どういう人であったのか、などがだんだんわからなくなってきています。

先生は1911（明治44）年11月9日に久留米で生まれました。向笠家は、もともとは豊津（福岡県京都郡）の出身で、豊津は小倉藩の殿様が長州藩の高杉晋作らに追われて移り住んだ所です。そこに先生一族のお墓もあります。

先生の父親は軍医だったので、そのために先生もあちこちに転居しています。小倉からソウル、水戸、久留米と転居して、中学校は東京神田の私立東京中学校に入学しました。その後、4年生の時に旧制山形高等学校に合格して入学しています。現在の山形大学です。

先生は若いころからいろいろな困難を背負っていました。まず19歳の時に父親を50歳で亡くされています。その時、裏山で涙にくれたという写真も残っています。その後、体調不良になり、非常に困難でつらい青春時代を過ごしています。九州大学医学部に入学した時も、当時結核がはやっていて結核性胸膜炎になってしまい、1年間休学しています。このころがもっとも厳しく辛い苦難の青春時代だったと思います。

その苦しい青春時代を立ち直らせたのがヨット部です。あの時代にヨットなどに乗る人などほとんどなかったそうですが、先生は何とかヨットをやりたいと九州大学にヨット部を創設。そのヨットを操船して強靭（きょうじん）な体力と精神力を回復しました。精神力を鍛えるためには、まず体を鍛えることが非常に大事なことだと思います。そのヨットを通じ、生涯の伴侶となる喜代子夫人を獲得し、学生結婚をしています。喜代子さんを乗せヨットで博多湾に出ると水泳が得意だった彼女が鵜来島あたりで海に飛び込み、自分はヨットを操船して、その島を一周して戻ってきて彼女を乗せて帰る、というデートをしていたようです。

先生は、『ヨット競技戦術集』（マンフレット・カリー著・ドイツ）という本を和訳してヨットの操船の基本を日本に紹介するなど、それほどヨットに傾倒したようです。練習の合宿中に仲間が急性虫垂炎になった時は、ヨットに乗せ博多湾を横切って病院まで連れて行ったこともあり、1940年には西宮で開催されたヨットの東亜大会で優勝をしています。当時としては珍しかったライフジャケットを娘さんと一緒に装着して海洋に出たこともあるようです。ヨットの操船でライフジャケットを装着した最初の人だったようです。

中津の人たちの役に立つ医者になる

先生は九州大学を1938年に卒業した後、大学病院の精神科に入局して5年間在籍しています。その後、別府の朝見病院勤務をしていたのですが、戦時中でもあり、軍部の命令により兵役に服し、小倉陸軍病院にも勤務しています。1945年、終戦になり再び朝見病院に勤務したのですが、終戦直後で物資不足による物価高のため、週2～3回アルバイトで中津市殿町の平田病院に来るようになったようです。

先生は、そういう状況の中で、学者になるか、あるいは開業医として生きるか、ある大学からの誘いもあったらしく迷ったようですが、結局、中津の人たちの役に立

つ医者になろうと決め、1946年、35歳の時に平田医院の一部を借りで精神科として開業しました。

とはいうものの、先生は医学者としても大変な功績を残しています。1939年、精神病の治療法として世界で最初の電気ショック療法を開発、発表しています。私も精神科の研修に行ったことがありますが、その時のままの電気ショック療法が使われていました。

先生のもう一つの功績は、嫌酒薬・シアナマイドを創案したことです。これを飲むと非常に気持ちが悪くなって、これ以上お酒が飲めないようになります。この薬は、今、大貞病院（中津市中原）の会長をしている先生の実弟と一緒に開発して、多くのアルコール中毒患者を救ったようです。

1964年にはロンドンで開催された第1回国際社会精神医学会で座長を務めるなど、学術活動も活発に行ったことで、中津だけでなく日本中に知られる精神科医となり、病院の前は、門前市をなすほど行列ができたそうです。先生は精神科を誇りに思い、世界初の治療法や薬を研究・開発したり学術活動をしたことで、開業当時は閑古鳥が鳴いていたという逆境をはね返し、精神科病院を盤石の名病院にしました。

また、キノコ博士としてもよく知られていて、暇さえあればキノコ狩りに行っていたそうです。キノコ博士として有名な今関六也博士とも交流があり、中津の人はキノコ狩りをしたら毒キノコか食べられるかを鑑別してもらっていたそうです。1980年、メルボルンでの地域大会に参加した時にホストクラブの院長のビーチハウスパーティーに招かれたのですが、その時、庭に自生していたキノコを採ってきて喜代子夫人が焼いて二人で食べたそうです。みんなは、その様子を20分ほど見ていて、大丈夫だと判断してから食べ始めたという逸話も残っています。また、暇を見ては連歌を詠(よ)む文化人でもあったようで、連歌集も一冊残っています。

1957年4月3日、中津ロータリークラブに入会と同時に幹事を3年間、3回も務めたそうです。その幹事を退任する時は、忙しい自分は、幹事なのにいつも時間ぎりぎりに出席していたにもかかわらず3年間も我慢して付き合ってくれた、と感謝のあいさつをされたそうです。そして1962年には会長に就任し、青少年奉仕に非常に関心を持ち、大貞の中津ドン・ボスコ学園を度々訪問しては恵まれない子どもたちの一日父親になって、時には子どもたちを小倉の遊園地に連れて行ったりもするなど、熱心に奉仕活動をされた方でした。

そのような奉仕活動などで先生はロータリークラブで瞬く間に頭角を現してきて、1967年には地区ガバナーに就任、1970年には国際ロータリー（ＲＩ）の広報諮

1981年太平洋地域大会で

オーストラリア・タスマニアで、地元のサンデイ・ベイ高齢市民クラブの庭に友情の記念植樹

1982年6月、ダラス国際大会の最終日に壇上で紹介される向笠廣次氏と喜代子夫人

問委員、1974年、在日本ロータリー財団推進諮問委員長、1977年、ＲＩアジア地域諮問委員、1978年にＲＩ理事となり、そして1982年、ついにＲＩ会長に就任されたのです。

このようにとんとん拍子にＲＩ会長になったものですから、私のような入会したばかりの者には何が何だかよくわかりませんでした。しかし、先輩たちは大変なことになったと大騒ぎしていました。というのは、全員が国際大会に行かなくてはならないことになったからです。二人のお嬢さんは結婚して、今アメリカに住んでいます。一人はハワイ、もう一人はシアトルです。

リウマチに苦しみながらも世界中を訪問

先生は、実は関節リウマチで、私はその時、相談を受けたのですが、だんだんと炎症反応が強くなっていきました。骨の破壊が始まっていたのです。当時は今と違い、リウマチを完全に止める治療法はありませんでした。それで金のイオンを自分で注射をするように勧めました。ＲＩ会長として、ＲＩ本部のあるアメリカ・エバンストンに住み、10か月間にわたって世界の国々を訪問したのですが、リウマチで破壊された手の骨が痛むので握手をすると痛くて辛かったとおっしゃっていました。

先生はお酒を飲めなかったのですが、お酒を分解する酵素を増やすために、ＲＩ会長になる３年ぐらい前から少しずつビールを飲んで練習して、大体１本ぐらいは飲めるようになっていたようです。骨がどんどん破壊されていくという、非常に困難な状況にもかかわらずいろいろなことに大変な努力をされたということです。

まさに「苦楽吉祥」という状態で、苦しみを乗り越えて「人類はひとつ　世界中に友情の橋をかけよう」というテーマのもとに頑張られたのです。皆さん方には、先生はいつも本当に楽しそうな顔をして演説をしているように見えていたと思いますが、医者である私から見ても非常に炎症反応が強く、骨が壊れつつある中をあれだけよく我慢して世界中の、しかも、それまでのＲＩ会長が行けなかったような交通の便の悪い地域ばかりを選んで訪問をしたものだと感心しています。全44か国、全旅程15万kmを公式訪問していました。

この先生の苦労を考えると、少々困難なことやどんなことでも乗り切れるのではないかと思います。私はリウマチの患者さんたちに対してもこの話をよくします。インドやスリランカ、アルゼンチンなどの不便な地域を訪問しては「人類はひとつ、世界中に友情の橋をかけよう。みなさんは全員従兄弟です。周囲の人と握手をしましょう！」と呼び掛けたところ、連呼の輪がわあ～っと広がったという有名な話があります。

このようにＲＩ会長の時は病気を押しての就任でしたから、帰国した時には、いきなり「帰ってきたけど寝たきりだよ」という連絡をいただき、びっくりしました。息子さんが「親父が大変なことになっているから、とにかく往診してほしい」と言われたので行きましたら、先生は寝たきり状態でまったく動けませんでした。それでレントゲンを撮りましたら、膝の軟骨は完全にすり減ってしまっていて、骨同士が直接ごりごり擦れている状態でした。どう考えても歩けない状態です。

ちょうどその時、リマチルという抗リウマチ剤が日本に初めて入荷されていたので、「先生、効くかどうかわかりませんが、使っていいですか」と聞くと「どうぞや

ってくれ」と言われました。それでこのリマチル剤を使ったところ奏功し100であった血沈が30ぐらいまで下がり、ようやく起きられるようになりましたが、膝が壊れていて歩けないので「人工関節をしますか」と聞くと「やってくれ」とおっしゃいました。大学病院で手術することを勧めたのですが、「いや、君の病院でやってくれ」と言われ、私の病院で手術することになりましたが、経過が良好で、かなりすいすいと歩けるようになりました。

患者さんとしてこんなに楽な患者さんはありませんでした。何の文句も言わず素直に言うことを聞いてくださいました。そして主治医を信じ切っていました。

会長の年度が終わった後も、3年間、世界中を訪問されていました。松葉杖(づえ)をついて歩けるし、長距離は電動車椅子で移動しましたが、「外国の方がバリアフリーになっていて楽だよ。日本の方が遅れているよ」と言いながら世界中を飛び回っておられました。

このような先生の努力と活躍に対して全国のロータリアンから2,900万円の募金が集まり、1985年11月4日に中津市内で、向笠公園の落成式が行われました。今、クラブの会員が月1回掃除をして、いつもきれいにしています。

世界でも日本でも飛び回って動き回るすごい人だと思っていましたが、1992年4月、転倒して大腿骨の付け根を骨折し、また入院してこられました。「まだ世界中を回りたいから手術をしてくれ」とおっしゃるので、手術をしてリハビリをしたら、元気に動き回られるようになりましたが、その後、1992年10月5日に82歳でお亡くなりになりました。先生の遺品は現在、中津城の一角に展示されています。ＲＩ会長の時の名札や、核兵器をなくそうということを書いた本なども展示しています。世界中を回った時に集めたり、いただいたりした貴重な品も展示されています。ぜひ皆さんご覧になってください。

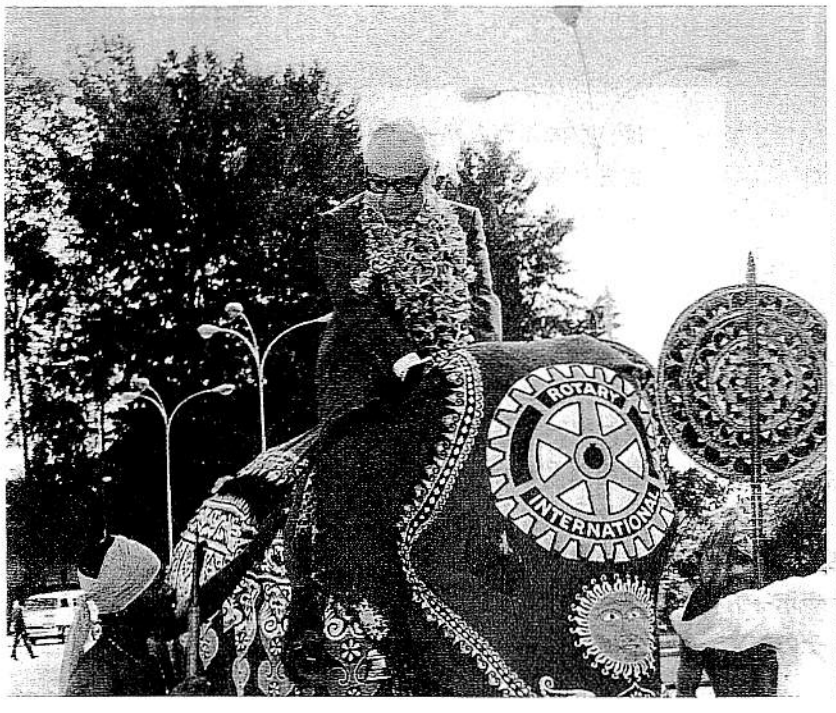
今年度、日本から3人目のＲＩ会長に田中作次氏が就任されました。そこで、この機会にあらためて向笠先生の功績を思い出していただきたいと思った次第です。

向笠先生は、「苦楽吉祥」、すなわち「本当に苦しいことはそんなに長く続くことはない。必ず峠を越えて幸せになる」ということを、まさに自分の人生を通して、われわれに教えてくれました。人間として生きることの苦しみ、その苦しみを乗り越えて世界を股にかけ世界中で大活躍をしました。

まさにロータリーに人生のすべてをささげ、ロータリーのために討ち死にした、殉職したという感じがしました。それくらいロータリークラブに大きなエネルギーをささげた人でした。中津にこんな素晴らしい先輩がいたということを若い後輩たちに伝え、その先輩に負けないように、どんな困難にもめげず「苦楽吉祥」、困難を乗り越えて自分たちの職業を通じて社会に奉仕することに全力を挙げていただきたいと思います。

（第2720地区　大分県）

1982年11月、スリランカ・コロンボで開催のＲＩ会長主催アジア親善会議開会式の一環として、像の背中にまたがり、パレードの先頭に立つ



1983年6月、インドで、マハトマ・ガンジーに献花